



# 名取市中学生海外派遣事業

## 中学生がカナダで見たもの(上)

目指すはカナダ西岸のまち「スーク」。名取からの距離はざっと8千キロ。太平洋をひたすら北東進し、10時間余り。たどり着いたのは日本より高緯度でありながら、強い日差しと暖かな風が吹く場所。住民によると、暖流が温和な気候をもたらしているらしい。それにしてもカナダは広い。国土の面積は約1千万キロ平方メートルで世界第2位。実に日本の45倍の広さ。果てなく続く森林、冠雪をたたえる峰々、払暁の海に広がるけあらし。その一つひとつが自然大国と呼ばれるこの国の輪郭を作っているよう。手付かずの自然にあふれ、太平洋を望むカナダのまちに名取の中学生たちが降り立ちました。彼らがそこで見たもの、聞いたことは。

(2回続き)

カナダ西岸のバンクーバー島(ブリティッシュコロンビア州)。その南西部に「Sooke(スーク)」というまちがあります。人口約1万3千人。中心部にスーパーマーケットや薬局、郵便局、ガソリンスタンド、新聞社、酒場などが集まり、それ以外は住宅が散在する静かな浜辺の地方都市です。

このまちの12歳から15歳までの子どもたちが通う「ジャーニーミドルスクール(JMS)」(生徒525人)に、名取市の中学生が訪れました。訪問は名取市中学生海外派遣事業の一環。毎年、市内の中学生がオーストラリアとカナダを交互に訪れ、ホームステイをするなどし、お国事情や異国の暮らしぶりに触れています。今年は中学2年生22人(男子10人、女子12人)が訪加。3月28日から4月2日までの間、JMS生徒宅でホームステイをしながら、同校の授業を受けたり、スークの行政庁舎や消防署、スーパーマーケットなどを見学したりして、見聞を広げました。

消防署を見た中学生は「日本では消防署に救急車が配備されているが、スークの消防署にはないのですか」と英語で質問。ブリティッシュコロンビア州では、救急車は消防とは別の組織が運用していて、しかも利用は有料であることを知りました。行政庁舎ではマヤ・テイト市長にも面会。母親が神戸生まれの日本人だというテイト市長は、人口や職員の数、普段している仕事の内容など、子どもたちの質問に優しく教えてくれました。庁舎は3階建てのこぢんまりした作り。中で働く人は50人ほど。「名取の市役所よりもずいぶん小さい」と驚いていた男子中学生。「日本に比べ、処理する仕事が少ないのかもしれない。カナダと日本の自治体の仕事の違いを調べたり、考えたりするきっかけになった」と話していました。移民大国を象徴しているように、まちや学校の廊下ですれ違ふ人たちの肌の色は様々。なるほど、世界は様々な人や多様な価値観でできている。まさに所変われば品変わる、なのだ。そのことを実体験として学んだ22人でした。

次回は、ホームステイへ。食文化や交通事情などはどうなっているのでしょうか。



スークの行政庁舎を見学。議場でマヤ・テイト市長と記念撮影に臨んだ(3月30日)



消防署を見学。道路の幅員が日本よりも広いためだろうか、大きな消防車が並んでいた(3月30日)



スーク中心部のスーパーマーケットの裏側を見てもらった。日本では見たことがない野菜や調味料などが高く積まれていた。(3月30日)